

サトリの
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗僧侶、岩手県立大槌病院医師
宮村通典さん

第23回

私は長崎県の大村生まれ、大村育ち。父は戦後、薬局を営み、母はとても信心深い人でした。そんな両親の影響もあり、医師として働いていた53歳のときに出家。その年になって「さらに何か役に立つことがしたい」と思ったのです。

昨年3月11日の東日本大震災のとき、私は故郷の長崎県大村市にいて、僧侶となった弟が大村で寺を開いたお祝いをしている最中でした。大震災のニュースを見て「これは大変なことが起こった」。甚大な被害を受けた岩手県大槌町が娘婚の出身ということもあり、

「この目で確かめたい」と9月に大槌を訪れました。テレビなどで見て大変だとわかってはいたものの、実際に目の当たりにすると言葉が失うほどの惨状。慰めの言葉もかけることができませんでした。

長崎から被災地へ移住して
医師として現地支援

大槌町にある県立大槌病院は津波によって全壊。仮設の建物で運営されていました。医師不足に悩んでいることも知りました。私は医師でもあり、僧侶でもある。「動くなら今」という気持ちで心にわき上がりました。娘婚が大槌出身という縁があったこと、住職になったばかりの弟が大震災の翌月、がんで亡くなったことも、私の気持ちを後押ししてくれました。

震災から約1年後の今年4月5日、表とともに大槌町に移住。それは「私もこの地に腰を落ち着けて仕事をします」という大槌のみなさんへのエールと、自分自身の覚悟からの決断でした。

被災者への震災の影響はとて大きなものです。夜眠れない、思いつきで動悸がする……苦しみや悲しみを引きずっている方がたくさんいらつしゃいます。私の専門は心療内科ですが、ここでは何でも診ます。診察室が3つしかない小さな仮設の病院ですから、患者さんであふれてしまうこともあります。でも、患者さんを診る日は、どこにいても変わらないのです。



津波被害のなかった地区に建てられた大槌病院の仮設診療所。常勤4人の医師が診療に当たる。

震災で家族を亡くされた方には、結局は寄り添ってさしあげるしかありません。辛い気持ちを話してくださる方はまだ良く、誰にも話さず、心に蓋をして閉じこもってしまう方もいらつしゃいます。私はそうした方にも救いの手を差し伸べたい。残された方へのケアが今の私の仕事だと感じています。

医師として僧侶として
被災地の再生を見届けたい

私は「死ぬことが終わりではない」と思っています。仏教にある「安心」という言葉のとおり、亡くなるときは安らかな気持ちで逝っていただきたい。そのためには、生きる人をどう支えていくか……。今こそ、お坊さんの出番です。宗教は生きている人のためにあるのですから。

今後は大槌病院を立て直すことになりまます。私はそのお手伝いをしながら、でき上がるまで見届けたい。それが医師であり僧侶である私の務めと思っています。

救いの手を差し伸べたい
被災者の心に寄り添い

みやむら・みちのり 1945年、長崎県生まれ。1973年、長崎大学医学部卒業。九州大学医学部心療内科勤務を経て、福岡市博多で内科胃腸科クリニックを開業。一方で53歳で出家し、僧侶に。大阪で数年の僧侶としての活動を経て、2002年から長崎県大村市の中澤病院で副院長として勤務。2012年4月から岩手県大槌町に移住し、岩手県立大槌病院にて医師として勤務中。